

AsiaWave

vol.172

2
ラオス写真館
広田直樹
ランテンの女性

5
特集 新春座談会
インド、人間分類の迷宮
黒川妙子
岩谷彩子
小西公大

15
緊急寄稿
**空港占拠事件とは、
なんだったのか？**
そむちあい吉田

18
Life&Culture
ランマン・愛
犠牲祭
桂川唯香
週末はおいしい金山へ行く
中園タクヤ
本「ソーシャル・ビジネスと
新しい資本主義」
孫添洋
中国改革開放30周年
亜洲奈みつほ
映画「風の馬」「雨が舞う」



撮影||小西早良紗

ラクダと沙漠の風景

小西公大

広漠な大地に点々と散在する家屋。インド北西部に広がるタール沙漠では、「隣家」が何キロも離れていたりする。そんな世帯間の行き来には、現地で「沙漠のタクシー」と冗談交じりに呼ばれる、ラクダが使用される。遠出や荷物運び、水汲みにも使える、生活の必需品である。鞍を設置し、またがると、思いのほか視点が高くなり、果てしなく続く地平線を見渡すことができる。

タール沙漠のラクダ種はヒトコブラクダで、体毛は短く、速度が速い。写真のラクダは私が市で購入し、長期調査に使用していたもの。ウイントニー(「メスのラクダ」の意)と名付けた。乗ラクダ技術はあまり上達せず、股擦れをよく起こした。暴走して振り落とされたこともあった。「アラビアのロレンス」のような世界とは程遠かったが、ウイントニーは今でも大切な友人である。

(特集の新春座談会を参照)

広田直樹 (ワーチエン) の ラオス写真館 ランテンの女性

サバイディピーマイ (あけましておめでとつございます) Laos Nature-n Photographer のワーチエンです。アジア
ウェーブの新春巻頭をラオスの美女グラビアで飾るためにやってきました。最近、ラオスと言えばクラスター爆弾
みたいな感じでマスコミに取り上げられることが多いのですが、ちょっと違う切口でラオスを見てみましょう。



ムアンシンの市場でバスを待つランテンのおネエちゃん。マジカッコいい(笑)



ムアンロンのアカの少女、思わずアッカンベエ(笑)



ポンサリーの街に一家で買い物に来ていたモンの少女、おめかしバッチリです。

「ラオスは美女の国?!」ムアンシンやポンサリー等ラオス北部にはアカやランテン、モン等美しい民族衣装で暮らす人々と出会うことで有名ですが、衣装だけでなく美女の宝庫でもあるのです。今回は、僕が撮り続けている写真で、それを証明しましょう(笑) まず、巻頭の写真はムアンシンの市場でバスを待つランテンの女性です。僕がラオスは美女の国と確信した一枚です。いかがでしょう、カッコいいお姉ちゃんですよ。では、ここからラオスグラビアにお付き合い下さい(笑)。



ブンヌアの市場で買い物するラオコーの少女、恥ずかしがってなかなか写真を撮らせてくれませんでした。



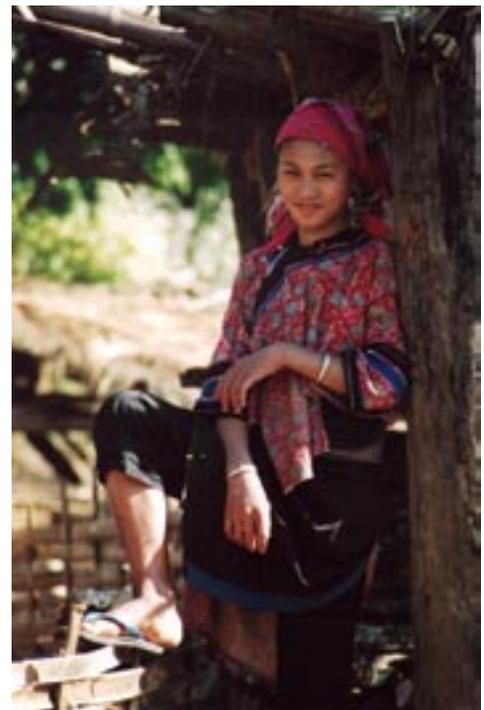
ルアンナムターのナムディ村のランテンの少女、手がランテン伝統の藍染で藍色に染まっています。



イッセイがおめかししようと、ラオスの服装になったところ。



ムアンロンのアカの友達の妹イッセイちゃん



ポンサリーのローローポーの少女。

ブンヌアでのモンの鞠投げお見合いで会った少女。この後、地元の学校の先生に口説かれてました(笑)

新春座談会 1

インド、人間分類の迷宮

黒川妙子

岩谷彩子

小西公大



ムンバイでのテロ事件、そしてその前におきたオリッサ州でのキリスト教徒襲撃事件など、イラク・アフガニスタンでの軍事行動にも強く影響され、今インドでも宗教の名のもとでの暴力が、普通の生活をいとんでいる普通の人々のすぐ隣に、ぶらさがっているかのようです。この1月に予定していた、先のグジャラートでの虐殺をめぐる「フィラーク Filarak」という映画のインドでの公開も、延期される模様です。ちがった価値観をもつ人々が共存していくための智慧をもう一度確認し、それを実行していかなければ、暴力と破壊の犠牲になる人々がますます増えることは自明でしょう。

多民族が様々な思惑で関係しあい、社会がなりたっているインドは、同時にこうした智慧も豊富にあります。こうしたインドの実像を理解するには、中心勢力の文化や社会とは距離をおいている、移動民など社会の周辺に位置する人々について知ることがとても役にたつことと思います。このため今回は、移動民についての研究で実際にフィールドワークをされた岩谷彩子さんと小西公大さんにお話をうかがうことにしました。ご自分がそれぞれ実感した世界を、今回は語っていただきました。(黒川)

岩谷 黒川さんとはホテルで最初に会ったんです。現地のホテルで。

黒川 レストラン。

岩谷 いや、フロントのところに行っちゃいましたよ、最初。

小西 チェンナイですか？

岩谷 タンジャーブルです。なつかしいな。小西さんとはどういう出会いで？

小西 僕は拓大でヒンディー語の公開講座があつて。

黒川 ヒンディー語を習ったんですけど、ほぼ忘れちゃった(笑)。

小西 随分前になります。十年以上前です。一緒のクラス、同級生で。

岩谷 フィールドはヒンディー語じゃないですね。

小西 違いますけど、とりあえずベースになるのがヒンディー語なので、そこか

ら始めようかなと。

黒川 何語をしゃべるのですか？

小西 マールワリーという言語です。

岩谷 マールワリーなんですか、ええー！

小西 そうなんですよ。

岩谷 ちょっとそれ、びっくりです。小西 そうですね。もしかしてヴァアギリって、マールワリーも入っていたりします、語彙として？

岩谷 グジャラート語とかラージャスターン語がはいってるんですよ。

小西 じゃあもうかなり近いものがある。

岩谷 近いと思います。

小西 北西から南まで移動があつた。

岩谷 それで私、小西さんにいろいろ話をうかがいたかつたんです。

小西 そうですか。

岩谷 マールワリーマールワリー地方(現在のラージャスターン州)出身の商人集団を包括的に指し、ランパディ(ラバリ)パンジャブとも呼ばれ、す言葉と博覧、現在では農耕や牧畜にたずさわる人々とヴァアギリ北インド出身で、狩猟業と移動民が兄弟だという神話があるんです。

黒川 十分ありそうな話ですね。

小西 どれも移動を重ねている。

岩谷 移動商人ということで。一番ヴァアギリが格下なんですけど。やっぱりマールワリーが、派手にやっていますから。

マールワリーって、集団名ではなくてカテゴリーなんですよ。

小西 カテゴリーですね。でもなんか微妙なカテゴリーで、結局なにをもってマールワリーとするか、いまいちよくわからない。

黒川 自分のアイデンティティの表現としてマールワリーじゃないのですか？



岩谷彩子 (いわたに・あやこ)

1972年生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程修了(人間・環境学博士)。広島大学大学院社会科学研究所・准教授。1996年から、インドの商業移動民ヴァギリを中心に、世界で「ジブシー」と呼ばれている人々の人類学的研究にとりくむ。主著に『夢とミメシスの人類学』(明石書店、2009年刊行予定)。

小西 集団名ではないんです。だからカースト名でもないです。
黒川 それでは誰がマールワリーなのですか？
岩谷 移動して商売する……
小西 職能のようなものからでしょうか。「マールワリー商人だ」といったような。非常に大雑把な分類です。
黒川 マールワリー語をしゃべっている人たちがという分類ではないのですか？
小西 直接言語に結び付いてないと思います。
岩谷 マールワリー語というのは？
小西 マールワリー語はマールワールで話されている言語、という意味です。マールワールというのはラージャスターン州北部の、独立以前の藩王国でいう、ジョードプル周辺のことをマールワールという言い方があるんです。マールワールで多分「殺す」の「マール」で、非常に好戦的なタイプのラージプット戦士ラージプットが跋扈していた地

域の意味で、マールワール地方のような形で言われている。そこで話されていた言葉が大体マールワリー、そこから出てきた商業民というか、世界に広がっていくトレーダー達がマールワリー、という言い方がされるんですけど、とくに「民族名」ではないんです。
岩谷 すごい広い地域に分布してますよね。
小西 世界中にいと聞きます。
黒川 ラージャスターン地方から外へ出てマールワリーというのですか？
岩谷 南インドでも言いますよ。あいつらマールワリーだからって。
小西 トレーダーとしてはグジャラーターイーなども有名ですよ。
黒川 ヴァギリって、トレーダーとして知られているのですか？
岩谷 行商人です。トレーダーということとちよつと商売の規模が大きく聞こえますけど。
小西 どんなものを扱ってどのような



ヴァギリ、巡礼地での行商

リードしているんですか。呪物？
岩谷 そうではないんです。それは彼らは呪物を扱っているに違いないという外部の人間の思い込みなんです。一応扱っていてもいるんですけど、彼らが作っているわけじゃないんです。
小西 実際にトレードしているものはどういったものなんですか？
岩谷 マーライといって、巡礼者が身につける首飾りとか、動植物から出来るお守りとか、手工芸品とか、針や櫛とか、雑貨ですね。簡単に持ち運びできる雑貨です。基本は狩猟採集民ということもあって、同時にいろいろな生業に従事しています。狩猟採集やりつつ行商みたいな。
小西 毛のついたお守りがあるという……
岩谷 そうそう。偽物のね。
小西 偽物……(笑)。一度見てみたいなと思っただけです。
岩谷 この中に映ってないかな(ビデオを指す)。
黒川 今度岩谷さんのDVD『呪術の気配—インドの移動民ヴァギリの現在』(2009)に、首飾りを売っている姿が映っていました。こうした小物を売

ってどのくらいの人々が生活をたてているのですか？
岩谷 みんなそういう雑貨販売ですよ。
小西 北インドにも売りに来たりしているんですか？
岩谷 原料を仕入れに行っています。北のほうに安いです。この映像作品は、いかに近年呪術に代表されるタミル人の信仰が彼らの社会に入り込んで来ているかというのを捉えようとした作品です。もともとヴァギリは呪術から距離をとってきた人々なんです。彼らは現地の人々の信仰から距離を置くことで、行商にたずさわることが出来るのではないかと思えます。呪術というのは知識の体系で、特定の人物や特定の集団に秘匿されるものなんです。彼らのような平等主義社会では、知識を誰かに専有させない、できたら避けたいというのがあって、呪術の体系と彼らの社会システムとが合わないんです。だから今まで全然入れてこなかったんだけど、最近彼らの間でもインドの市場経済化にもなつて個人に富が集中したり貧富の格差が生まれてきています。そういう経済格差と呪術の受容は深い関係があると考えています。
小西 格差が生まれてくると呪術にも入りやすくなる。
岩谷 そうですね。現実を変えようとする人たちが増えてきて。今までは集団でリネージ種族単位なる集団の神様とかを拜んでいたんですけど、それが変わりつつあるんです。



小西公大 (こにし・こうだい)

1975年生まれ。日本学術振興会特別研究員(首都大学東京)。インド北西部、パキスタン国境付近に広がるタール沙漠をフィールドとし、トライブや多様な芸能集団の織り成す社会的ネットワークの研究を進める。主な業績は、『『トライブ』と社会関係』(『社会人類学年報』33, 2007)、『神と人/人と人を結びつけるもの—タール沙漠の諸芸能集団をめぐる』(鈴木正崇編『神話と芸能のインド』山川出版社, 2008)など。

黒川 経済的な変化を契機に、別の神さまを拜むことになるというのはおもしろいですね。

岩谷 そういうところに発して、人間同士のトラブルが生まれるでしょ、それをどう解決するかというところで、これまでだったらその集団の神様をお願いするわけなんですけど、一番頼りにしてきた集団がいまでは対立の元凶になっていたりしています。だから元凶になる集団の神様をお願いすることはできない。で、外の神様に行く。そうするとタミル人の神様になって、それが呪術の神様だったりする。今、全インド的に呪術が流行っているんです。巡礼とか呪術とか流行りつつある。彼らも例外ではありません。北ではどうですか？

小西 巡礼は年々大規模なものになっていく気がしますね。ラージャスターン北西部のごく小さな町に、ラームデーヴァーという小さな英雄神の寺院がある。その神様の信仰が南インドまで広がっている。

で、そこから巡礼がやってくるんです。デリーの富裕層とか中間層なども、電車で大挙してくる。

岩谷 苦行もありますか。
小西 どうかなあ。
岩谷 南インドの巡礼は苦行をとめないます。

小西 巡礼者が苦行するんですか。
岩谷 そうです。巡礼って神へ自分を捧げる行為じゃないですか。だから普段とは違う衣装を身に着け、断食して、巡礼地まで歩いていったりするわけです。

黒川 富裕層の巡礼はどうでしょうかね……
小西 ものすごくいい格好して来ますよ。電車はエアコン付きの一等車両に乗って。

黒川 イスラム教徒のメッカ詣りのハツジみたいには？
小西 そう、ハツジみたいな感じで。

岩谷 地域を超えて一体感を感じたいんでしょうね。今社会がばらばらになって

きているから。
小西 特に中間層に関しては、ですね。連帯というか。

岩谷 村とか集団レベルに人々がリアリティを感じなくなっているんだと思うんです。だから南インドでもそうなんですけど、集団や村の単位を超えたところで全体を想起して、インドという「想像の共同体」とか、地域を超えた神様の世界の中でそれぞれが再編されていくというのが見えますよね。

小西 共同体的な想像力がだんだん崩れていくようなことは、村落部でもたしかに見られます。

岩谷 それはすごく社会変化として今起こっていると思うんです。
小西 ありますね。より流動化している。

黒川 社会的に成功したり経済的に余裕ができる人がでてきたり、社会は変化していつてはいても、一方で例えば先月に来日したタミルナドゥ州のシャクティというグループが行っているダリット

カースト制で不可触民とされた人々の解放運動をみて、ダリットへの差別意識といったものは温存されていますよね。

岩谷 なくならないですよ、たしかに。
黒川 社会関係としては変わるんだけど、差別の実態は全然変わらない。

小西 でもダリットの人々が、差別構造の問題を自分達で語ったりする時の主張と、もっと場に縛られたような、共同体的な差異の構造の中で自分の立ち位置を語るものと、またちよつと違う位相が存

在するのかなと思うんです。前者は、場に縛られたものではなくて、もっと横にネットワークとして広がっていくような中で、自分達のダリット性のような差別意識を基盤とした連帯を生み出している。

黒川 そして政治的勢力としては、ダリットは大きな力をもっていますよね。しかし勢力をもてばもつほど、抵抗も大きく、差別も強くなることもありますよね。

小西 より強化されているということは、ないですか、その差別構造が。

黒川 されているんでしょうね。このあいだもタミルナドゥ州の大学が一時閉鎖されたとか言っていました。それはダリットの学生が法学部に入学したり、ダリットが法曹界に進出することを危惧した人々が、大学に圧力をかけたことに対してダリット学生たちが抗議デモを行ったのだそうです。法学部にもダリットの学生が増えてきたこと、こうした事態になったようです。

岩谷 優遇政策はインドでは独立後の憲法でカーストの記載が憲法から削除されたこと、政策が適用されている。差別が働いているから。でもたとえば教育や雇用の面で優遇されても、個人の能力と齟齬をきたしている場合もあるんです。だからどこまであれが有効に機能しているのか。ある程度は大それたと思うんですけども、今度は逆に差別になったりしています。

小西 その可能性はありますよね。
黒川 ジャミア・ミリア・イスラミアというデリーにある国立大学の先生をして



黒川妙子（くろかわ・たえこ）

南アジア芸能研究者。国際識字文化センター（ICLC）事務局長。恵泉女学園大学非常勤講師。「南インド・タミルナドゥ州・ダリットの太鼓文化『タップ』研究」で博士号取得。ユネスコ・アジア文化センターで長年アジア太平洋地域の文化事業、識字教育などに携わる。タイ山岳民族 NGO に勤務後、インドにて伝統民衆芸能等の調査・研究を行う。

◆インドにおけるイスラム

いた人の話では、学生の定員が二十人になるとすると、優遇政策が適用されない一般枠はわずか五人か六人になってしまっていると言っていました。イスラム教徒、ダリット、女性と、優遇政策の対象になる人数が多すぎて、とてもまともな学生は集まらないというのです。先日有名な大病院の医師募集の全ポストが、優遇政策の対象にされ、医師によるストライキが行われていました。

小西 ムスリムを指定した O B C (Other Backward Classes) （先述階級でもないが、後述階級「指定カースト、指定部族以外のカーストの感傷を指す。まで含めると、インド国民の半数を超える人々がリザーブされてしまうことになるんです。弱者やマイノリティを保護するという前提がもう機能しなくなっている。」

岩谷 でも M B C (the Most Backward Classes) （後述階級で後述階級よりもさらに下層に位置するカースト） とかは入らないでしょ、そういうのに。

黒川 北と南の違いといえば、たとえば南のイスラム教徒はちょっと違うんです。もつと商業と結び付いているというイメージがある場合もありますし、ステレオタイプでは北のイスラム教徒はどちらかというと、貧しいというイメージをもたれているようですね。

小西 そんなイメージはありますね。
岩谷 南のイスラム教徒は貧しいというイメージはないですね。

黒川 異教徒間の結婚をしていて偏見はもたないと言っているデリー市に住む友人でも、やっぱり「イスラム教徒は貧しくて汚い」という感覚をもっているといっていましたね。

小西 とくに都市部だとムスリムであるとかヒンドゥであるといったような、コミュニティ的な二分法が明確に見えてくるんですけど、僕が調査している沙漠のローカルなエリアでは、また面白い状況がある。たとえばマーンガニヤールという芸能集団はヒンドゥ教徒をパトロンとしています。彼らはヒンドゥ教徒の世帯の系譜を朗々と暗唱する。また、その世帯の出産儀礼や婚姻儀礼の際に演奏して、その花婿がいかに美しいのか、いかに神に近い存在であるかということをや々と歌い上げるんです。ヒンドゥ世帯が保持している神話の体系も全部マーンガニヤールが引き受けて歌い上げるわけです。憑依儀礼なども、女神を降ろす役がマーンガニヤールなんです。つまりイスラム教徒なのにもかかわらずヒンドゥの神様を降ろしたりとか……

岩谷 自分の身に降ろす？
小西 自分じゃないんです。ポーパという託宣などを行う呪医がいるんですが、彼らに降ろすために演奏するわけです。あとは神話語りをやったりする。ヒンドゥ的な女神であったりローカルな神々をムスリムであるマーンガニヤールが司っているという、ちょっと奇妙な形です。
岩谷 それは昔からそういうことになっているんですか。

小西 そうだと思いません。
岩谷 歴史的に、昔はヒンドゥ教徒だったとかではなくて？

小西 起源はよくわからない。特にタール沙漠エリアは、インド地方、つまり国境以西のイスラムの世界と、インド側のヒンドゥ的世界とのミクスチャー状態になっているところなのです。そのように考えると、今我々が政治学的に考える

ヒンドゥ／ムスリムという二項対立的な認識では説明がつかないことが多い。彼らにとつては、ムスリムだろうがなんだろうが、我々の門付きの芸人であり、我々の神様をお祈りする人々なんだ、というような世界です。

岩谷 ベンガル地方でもポトゥア （ベンガルで「語り継ぐ」を意味する） なんかもそうです。

小西 そうですね。タール沙漠の例のように、ムスリムとヒンドゥが混在した世界がインドの中にまだかなり残っている。
岩谷 門付にいく先々によって宗教の考えを変えていく。

小西 あとはイスラム聖者崇拜にもこうした世界が見られます。ヒンドゥの人々が、イスラムの聖者に祈りを捧げに行くのは、ごく自然に見られる光景です。
岩谷 巡礼地でもヒンドゥの神様とイスラムの神様が両方巡礼の過程にあつて、両方にお祈りして本拠地に行くことになっていたりします。

小西 それはたぶんスーフィズムの系統の聖者廟とかだったりするんです。
岩谷 民衆宗教、芸能、生活のレベルだと、ヒンドゥ、ムスリムというのはないんです。神様だから一緒みたいなお祈りかな世界がある。それにも関わらずあいう（ムンバイの）煽り立てるような事件が起きる。

黒川 カタックという古典舞踊がありましかれど、これはインドのヒンドゥ教徒の人もパキスタンのイスラム教徒の人も

おどるんですね。ヒンドゥ教徒のおどるカタック舞踊と、イスラム教徒がおどるカタック舞踊と、同じカタックですけどもおどる内容やテーマが少しちがってきます。ヒンドゥ教徒の踊り手はクリシユナ神とラーダ妃神とおどりますが、パキスタンのイスラム教徒の踊り手は、スーフィの信仰を表現しているようなおどりをしておどります。このカタック舞踊は多数のヒンドゥ教徒を少数のイスラム教徒が支配したムガル帝国の宮廷で発展したおどりですから、二つの宗教が対立などしていないんです。そのへんでスーフィというのはつなぐ結節点という感じがありますね。

岩谷 イスラム神秘主義ですね。
黒川 専門的にはわかりませんが、スーフィの信仰はいわゆる教義主義ではなく、もっと個人の体験とか信仰で神と一つになることを重視しますよね。コーランやバイブル至上ではなくて。対立せずに、違う方向であってもそれぞれの表現が出来るみたいな感じですよ。カタック舞踊も、そもそもヒンドゥ教徒のものかイスラム教徒のものかというのはいかしい話で、そういうこと議論が変なのですよね。でも私はパキスタンの踊り手を知らない時には、イスラム教徒には踊りや歌のたぐいは禁止事項ときいていたので、パキスタンの男性によるカタック舞踊を最初に見たときは、感動でした。伊朗のイスラム教徒も公衆の面前で歌ったりしてはいけないからと、楽しく皆

で集まっていた時に、他の人たちが歌うたつても、伊朗の友人だけは詩の朗唱でその場をしのいでいたのをみていたので、パキスタンもそうなのかと勝手に想像していました。

岩谷 パキスタンはありませんよね。
黒川 やっぱ踊りとか芸能のレベルでは、宗教の垣根も認識もちがいますね。みんなもつとそれを思い出したほうがいいね。

岩谷 そうだ、みんな踊ってしまえ！
(笑)

黒川 前にベンガルの絵語り師兼僧侶の例で聞いたのは、ヒンドゥ教徒の檀家さんところへ行くと、ヒンドゥ教徒の檀家さんで名乗って、絵語りなどもやるんだといっていました。そしてイスラムの檀家さんところへ行くと、イスラム教徒の名前をもっていてその名前でおっているのだそうです。でも本人ももしかしたら周囲も、二つの宗教のそれぞれの名前をもっていることに特に矛盾を感じていない。サバイバルに必要なことをしているだけなのでしょうね。

岩谷 衣装も変えるって金先生の本「インド・パキスタン地方の絵語り師」には書いてありました。

黒川 この人たちは自分はイスラム教徒でも、その信仰とヒンドゥ教徒向けの仕事の内容とが共存しているのがいいですよ。ね。

岩谷 でも生業としてやってるんですよ。

小西 生業としてもやってるんですけど、わりと女神に対する気持ちは本気だったりするんです。(笑)
黒川 でもそれはお客さんのためにやっているわけじゃない。

小西 それだけじゃないんです。

黒川 自分の家のためにも祖先語りや女神信仰儀礼をやるのですか？

小西 それはやらないと思います。ここまではヒンドゥでここまでではイスラムなんだという分け方そのものが、あまり重要ではないんです。我々は、家ではムスリムの生活をしているよというようにすることもちょっと……

岩谷 生活はそうだけど、商売する時も神のもとで一つなんですか。

小西 彼らにとってはもう底が繋がっているんです。だから、僕たちは商売でやっているからヒンドゥの神様もやる、というような感覚でもない。

黒川 たしかに伊朗やパキスタンでは女性が髪や肌を隠すベールに、ピンク色とか派手な明るい色は見えないですよ。でも同じイスラム教徒の国マレーシアの女性たちのベールは、派手なピンクや赤。たとえばサウジアラビアでは全身を黒い布で覆うけれど、それは各地方の条件であって、ただイスラム教という土俵に、同じように並べるわけにはいかないですよ。だってマレーシアのイスラム教徒がより信仰心が薄いという話にはもちろんならない。つまり形として具体的に信仰や宗教が表現される時にも、ヒンドゥ

教徒やイスラム教徒であるという条件は地域によって違ってきますよね。いかにそれぞれの地域の文化や自然条件に規定されるかということがあるのに、これを無視してただヒンドゥ教徒とイスラム教徒など対立項にするのはずいぶん無理な話です。

岩谷 だから南のムスリムも違うし、北のムスリムも違う。

小西 ラージャスターンのムスリムは、またちよつと違うような雰囲気があるのかなと思います。

黒川 ベンガル地方のベジタリアンは魚を食べるといいうのも有名ですね。あれは全然問題ないと。(笑)

小西 魚はベジだ、という言い方は聞いたことがあります。

岩谷 どういう区分なんでしょうね。

小西 あと、卵をどっちに入れるか。卵はベジタリアンでもOKというところも多いじゃないですか。

岩谷 トマトはだめというところもありますよね。

黒川 そうなの！？

小西 聞いたことない！

岩谷 トマトって赤いので、切ったときに血を思わせるんです。肉みたいなものと考え。

小西 カテゴライズが多様なんですね。

黒川 鱈があるとかないとか。前にインドネシアのイスラム教徒に、豚肉を知らないで食べちゃったらどうするかときいたら、知らなかったらセーフでそれを償

うような回復の仕方があるということも聞いたことがあります。

小西 穢れ観と関係しているのでしょうか。例えば、食べたことよって、体に穢れが付着したのであれば、浄化儀礼というものをいうといったような。

黒川 南インドのタミル人は、「穢れ」についての意識が強いですよ。例えばこの太鼓（部屋に飾ってある）をブラーミン^{カースト階級上}の家に持って入ろうとすると、入れないですよ。今でも。

岩谷 持っていくだけでも駄目なの？

黒川 進歩的な人は困ったような仕事をすんだけど、口では一応進歩的に言わなければいけない、でもあまり歓迎しない。

岩谷 何なんでしょうね。私たちが見ているように「太鼓」とかではないんでしょ。うね。なにか禍々しい……

黒川 さっきの岩谷さんのDVDのなかで、呪いをかけた後を燃やしたのと同じような感覚なのでしょう。人間はイメージして自分がつくった穢れに自分がいざられる。

岩谷 チャッパル、サンダルをね。

小西 なぜ燃やすんですか？

岩谷 これは呪術、邪術のあとに、その上に穢れを加える、チャッパルというのはより穢れが強いものなんですね、それを投じることよって、消してしまおうという。

黒川 わかりやすいね。毒は毒で制して。友達のタミルナードウ州トゥリッチー市

内のブラーミンのうちに行ったときに、このタッピー太鼓を持って行ったら、友だちに、「ちよっとこの太鼓は外に置いてこう」とか言われて、母親には絶対に見せられないと、太鼓を家の中におかせてもらえなかった。

岩谷 なんで？ その理由は？

黒川 この太鼓はダリットの人々が上位カースト・ヒンドウの人たちの葬式に使うのよ。

岩谷 ああ。

小西 死の穢れと結び付いている。

岩谷 それは理解できるかもしれない。

小西 動物の皮だから。

黒川 牛だから。

小西 やっぱ死骸処理という、「穢れた職業の賤民」という意識が生まれるのでしょうか。

黒川 蜥蜴だったらいんだって。(笑)

岩谷 血が流れないから。

黒川 太鼓もいろんな皮がありますよね。山羊の皮とか。カンジラという打楽器は、蜥蜴。南インドの古典音楽はブラーミンの文化を代表するものの一つで、聖なる精神性や清らさをうたう世界。

しかしそこにも太鼓は欠かせないので、太鼓にはやはり皮を使わなければならないので、ちよっと穢れそんな分野なわけです。(笑)

小西 パラモンの世界にあってこれだけは許せないみたい。

黒川 でも打楽器は必要だし。で、これは山羊だ、これは蜥蜴といって、できる

だけ穢れを最小限にとどめたいという感覚がはたらくのかもしれない。

小西 でもカンジラってこれくらいはありますよね。こんな大きな皮を張れる蜥蜴って……

黒川 どうやって鞣してるんでしょうね。

岩谷 蜥蜴じゃないんじゃない？

黒川 確かめてみないと。(笑)

小西 あの太鼓は水牛ですか。

黒川 もともとは牛を使っていたみたい

ね。でも使う人自身もちよっと穢れてはいないと言いたいから、水牛が今は多く使われるみたいです。(黒川、太鼓を演奏)

でも、音を自分が発するというのは大きいね。自分が発信源だというのは。私は今まで踊るときに、音というのは他の人が発して、あつちから来るそれに合わせてた。これを叩くと自分が世界の中心ですという感じ。

◆ピールの歴史と社会

黒川 私は今、タミルナードウ州のダリット解放運動にかかわっている人たちと

交流があるので、タミルナードウ州のダリットをめぐる状況を少しは肌で感じる

のですが、タミルナードウ州は反ブラーミン主義やダリットの問題が独立運動時代にも大きくに関連して、政党の

かかげる理想は、不公平な社会を公正な社会にしようみたいなことだったのですが、こうした理想はいつこうに実現する

ことがないような感です。しかし実際には、生き残るためになのですが、タッピー太鼓のことを研究するなかで、ダリットの人たちは新しい文化をつくっていく

重要な担い手であることを知りました。**岩谷** 票田として利用したんでしょうね。パーセンテージが一番高いんです。

全インドの中でも、ダリットとか不可触民に分類されるような人たちのパーセンテージが一番高い、だから彼ら自身もアーデー・ドラヴィディアン^{最初の原・ドラヴィディアンに属していたとされるドラヴィダ人は、インドに居住していたとされるドラヴィダ人の祖先と推測されている。南インドのダリットの自称のうちの1つ。}とか自分のことを言っているように、自分達こそが原インド人なんだ、ドラヴィダ人なんだと。

黒川 インドス文明の担い手だと言っています。

岩谷 そこからアーリア人が入ってきて南に追いやられて、ダリットになったんだと。もともとは俺たちの国だったんだという意識もあるんです。

黒川 インドス文明の担い手である、先住民であるところのダリットという議論は、インド北部のダリットの中では南部と同じようにあるんですか。



小西 そういふ人はいますけど、僕が調査しているエリア（タール沙漠）では、いわゆるダリット地位向上運動のようなものは、あまりみられない。たとえばウツタルプラデーシュ州などでは、かなり動きがあるようですけど。

岩谷 あとマハーラーシュトラでしょうね。

小西 あの辺りは多いですよ。

黒川 北西インドはそうでもない？

岩谷 「北西インド」は、北西インドの北西部に位置する。人口は1千万人を定めている。 トライプが**多い**から。

小西 トライプの権利獲得運動はたしかに多い。あとはリザヴェーションが絡んでくる。配分の問題ですよ。そこで揉めたりということはありません。

黒川 でもST (Scheduled tribes) の定義に「孤立性」ということがあるんですけど、でも現実には部族民のひとつ「ビールBhil」「インドの指定種族」のひとつ、インド西部の「インド」に属する。人口は10万人を定めている。の人々とかかって孤立していたわけじゃないですよ。

小西 まったく孤立してないです。

黒川 じゃあどうやってSTの要件を満たすんだらう？

小西 どういう過程でSTと呼ばれる人たちが認定されたかというところ、やっぱりセンサスなんです。植民地期の国勢調査。19世紀末からベンガル地方から始まっていく。ビールの場合だと、もともと「山の人」という言葉自体が曖昧な言葉で、ゆる狩猟採集民と呼ばれている連中、と

いうような漠然としたものだった。ビールと呼ばれた人々の中にも多様なエスニシティをもった集団が存在したんです。しかし、「平地民」から見て彼らはみんなビールだと、すごく包括的に……

岩谷 山地民。

小西 山地民のような形ですね。だから非常に曖昧な、包括的な概念です。歴史的に見ていくと、本来狩猟採集民が多く居住していたアラヴァリー山脈はラージャスターン州の南側にあるんですが、そのあたりには確かにビールと呼ばれていた人たちがいっぱいいた。そのあとで世になってラージプート諸王朝が興ってくる。そこで混交も行われるし、ラージプートの配下として、戦時に先頭に立つ歩兵として次第に吸収していく、いう流れがあるんです。だからその時点でかなり混交も進んでいるし、ラージプートと結び付きながら王朝を成立させていくというようなことがある。その過程でビールという語彙は、「山地民」という漠然としたものから、実体的な集団のカテゴリへと変化していくんです。

岩谷 それ、南インドでもありますね。

小西 固有名詞化していく。

岩谷 インドってそうですよ。

小西 イギリス植民地期に入ると、徹底的な社会分類が行われ、文字化されていく。そのときに、ビールといえば、じゃあ「トライプ」だねということ、別な

岩谷 カテゴライズがなされる。

岩谷 じゃあ平地に下りてきている人は

かなりいますか。

小西 はい。山地民のほうが、むしろ探

すのが大変です。僕の調査地ではトライプという感覚は希薄。違う集団だけれども、様々な職能を果たしている諸集団の中の一つ。そういう意味では、「カースト」と言ってもおかしくないほど他集団との接触度は高いし、ネットワークを保持している。社会構造の中に完全に埋め込まれて存在している。

岩谷 ビールはなにしているんですか。

小西 ビールと呼ばれる人々は狩猟採集を行っていたけど、そのあとでラージプートに取り込まれていくという過程があった。そうすると独立後は王権の戦士として生きていくわけはないので、農業労働や各種サービスなど、さまざまな新しい職に就かないといけなくなる。それまでの王権との関係が崩れてバラバラになっていくんです。

岩谷 とくにこれというのがあつたわけはない。

小西 はい。ラージプート王権の時代には、戦士であつたり見張り役であつたり、



警備とか警護に携わることが多かったんですけど、そういった村落社会のリジットな部分は無くなってしまった。ラージプート王朝、王権も、政治的権力を失うので、独立後は何をしたらいいかわからない、というような状態だったんです。

だから大抵農業労働者のような形で、ラージプートが持っている農地を耕したり

というところから少しずつ……

黒川 取り込まれたけど、土地所有はない？

小西 なかった。戦士や見張り役などで自分達の生活の糧を得てきたような人たちでしたから。でも狩猟採集民的なところは現在も残っていたりします。いまでも鹿を追っかけたり、オオトカゲを追っかけたりなど、狩猟を行います。だから彼らと一緒に生活していると、「おい、明日鹿狩りに行くから朝早く起きろ」、みたいなことはよくあります。それは自分達の食べ物を得るためというよりも、アイデンティフィケーションと結び付いたようなところがあると考えます。俺らはトライプだから、狩るんだと。

銃とかライフルに対してのこだわりや誇りがすごいんです。あと、射撃の巧さであつたりとか。

岩谷 銃を持っていいんですか、今。

小西 ライセンス式なんですけど。

自慢の旧式の銃を抱えて立つビールの男性。とても老けて見えるが、歳は50前後。頭にはビール特有の巻き方がされているターバン（現地ではポーターティヨと呼ぶ）。脇に立つ少女は、この男性の三女。甘えん坊で、いつもお父さんにべったりくっついてい

る。左に立てかけてあるのはラクダ用の鞍。

岩谷 なんか最近タミルナードゥは厳しくなってる。

小西 今はきびしいです。

岩谷 ライセンスも取り上げられて、本当に狩猟してはいけないことになったんですよ。

小西 あの……隠してます。

岩谷 やっぱりそうなんだ。

小西 銃一式はすごい奥に隠している。

岩谷 インドの場合、選挙だったり、なんか暴動があったりすると、銃を持っている人がなにかするんじゃないかというので、政府が警戒しているんですね。それで結構いま厳しいんです。

小西 あとは女性関係のもつれなどで撃つちゃったりするんです。村落社会では、よくそういうことがある。お前、俺の妻を寝取ったな、バーンって。

岩谷 関係ないですけど、インドの銃って面白いですよ。旧式な感じが。

小西 ものすごい旧式です。

岩谷 警官が持っている銃もすごい古いやつで、あんなのちよっと日本では見られない。

小西 火薬つめたりとか、火縄銃みたいな。(笑)

岩谷 こないだのムンバイの暴動でも、警察の方が持っていました。

小西 ヴァギリも狩猟採集民というところで結び付くんですね。銃をどうするかというところでも、結び付けてくる。

岩谷 現在も狩りやっていますか。

小西 毎日！ じゃあ全然頻度が違うなあ。

岩谷 でもやっぱり、こつそりと。どうしても彼らのアイデンティティの一部として、狩猟採集の側面は重要なのですが。

黒川 それは外から見ると、自分達はこのイメージで、という意味でじゃなくて、狩りをするということが自分達の本来の姿だ、と。

小西 どこかそういうのが脈々と引き継がれてきているのかなという気がします。

◆芸能の担い手たち

黒川 そういう伝承みたいなものはあるんですか。自分達の祖先がこんなことをして、とか。

小西 ビールに関していうと、結局彼らの伝承を残してきたのはムスリムの楽師集団であるマーンガニヤールなんです。

マーンガニヤールは、ラージプート寄りの伝承を残すわけです。だからラージプートとの結び付きを、マーンガニヤールはすごく強調するんです。たとえば、ビールというのは55代目のなんとか王のときに女神が娘として生まれるんですけど、その女神の兄弟がビールであり、というような説明の仕方をされる。

黒川 他のヴァージョンを歌う人はいないんですか。

小西 マーンガニヤールが歌い上げるものが、彼らの正統なヒストリーなんです。

岩谷 系譜屋みたいなこともやっている

とか。

小西 そうです。系譜屋もやるんです。系譜屋もやるし神話語りもするし、家系を称揚する芸能も行う。儀礼的側面だけでなく、エンターテインメントのような要素も強い。いろんなものを担わされている。

岩谷 でもマーンガニヤールの演奏は、美しいですよ。

小西 ほんとに！

黒川 私以前一回、チェンナイの芸能祭に、コーマル・コタリさんがラージャスタンから少年たちの歌手を連れてきた時にききましたよ。十四歳、五歳で代々歌をうたっている家の子ども達だけれども、修行中の彼らはもう信じられないくらいうまかった！

小西 とくにコーマル・コタリが連れてくる芸人は、沙漠の中でも最高峰の、本当にローカルなだけで、一つ一つ村を巡って一番最高の子たちを集めるんです。

黒川 涙が出るくらい！ 子供だけど、その訓練、ヴォイシングテクニクとかちゃんとある。大人が歌うのももちろんいいんだけど、少年が歌うのはもう想像がおよばないくらいよかった。

小西 コフツォ・ドローム1993年に公開されたヒンドゥー映画の映画の一番最初に流れてくる少年の声がたぶんコーマル・コタリ関係の少年ですよ。あれを聞けばどんなに少年の歌う声が美しいかわかります。コーマル・コタリというのは、

民俗誌家のような形で、もともとジョーダブルが本拠地なんですけど、その周辺のいわゆるフォークアートであったり、フォークテイル、民話をずつと追いかけて集めていた人です。とくにタール沙漠エリアは、芸能集団が世界的に有名になって一フランス辺りから始まってます

けれども一マーンガニヤールやランガーといわれている人たちや、ジョーギー、サペラーと呼ばれるいる蛇使い集団、女性の舞踊集団だったり、そういうものが世界で受容されていって、いまやジプシー・ミュージックの源流だという言い方がなされている。

岩谷 ジプシー音楽の源流だということから注目が集まったんですよ。

小西 そこから注目が広がっていくわけです。その仲介役としていたのがコーマル・コタリという人で、世界でさまざまな民族音楽が受容されるときに、コーマル・コタリに聞けば、とにかくタール沙漠の音楽はわかるんだと。

岩谷 何歳ぐらいの人？

小西 もうお亡くなりになりましたね。結構高齢で。日本で1988年にインド祭という大規模な催し物があった。そのときにランガーやマーンガニヤールなどが、大勢日本にやってきているんです。

僕が父がそのコーディネーターをやっていたんです。そのとき初めて父がコーマル・コタリに会って、二十人ぐらいの芸能集団を呼んで日本で公演した。

現在も狩りやっていますか。

岩谷 映像とか残ってないんですか？

小西 それがないんです。

岩谷 もつたいない！

小西 あるのかなあ。

黒川 きつとどこかに探せばあるのでは？

岩谷 是非見たいですよ。

小西 88年だったら、ありそうだけど。僕が小学校6年生のときだったん

「指定トライブ」ピールの婚姻儀礼で演奏する、ムスリム楽師マーンガニヤールの青年。パトロン世帯の新郎を称えるフォークソングを次々に披露する。楽器はハルモニウムと呼ばれるリードオルガン。左手でふいごを動かし、右手で鍵盤を奏する。



同じくピールの婚姻儀礼に現れた蛇使いカールヘーリアーの男性。ピールと呼ばれる吹奏楽器を奏でると、籠からコブラが顔を出す。楽器ピールを左右に振ると、それに合わせるようにコブラが揺れる。彼らは特定のパトロンがいるというより、儀礼や祭祀の場に出かける場合に出かける。パフォーマンズを行う。そこで得られるハクシーシ（喜捨）が彼らの生活の糧となる。

です。そのときに聴いたランガーやマーンガニヤールの音楽に狂ってしまった。それでインドに行ったときにジャイスルメールを目指したんですよ。それ以来の縁というか、調査を続けているのは、あのとき聴いたマーンガニヤールの歌声がずっと残っているからなんですよ。だからマーンガニヤール研究ではなく、他の研究対象（「トライブ」ピール）にいったかもしれないけど、僕をあそこ連れて行ったのは88年来日したマーンガニヤールの歌声だったのかなと。小学校6年生でマーンガニヤールの音を聴くというのは……

岩谷 本当にならぬ経験ですよ。全然違うでしょう、他の集団とくらべても。

小西 独特のメロディラインであったり、カッツワリーなども、ちょっと近いかと思えますが……

岩谷 拍子が違いますよ。スーフイーといつか……

小西 スーフイーの匂いがします。そうするとちょっとカッツワリーとつながってくるのかなと思うんです。「ラッチョ・ドローム」なんてまさにその、タール沙漠から始まって、エジプトからヨーロッパに入っていくという音の類似性を追っかけていくような映像叙事詩じゃないですか。そうするとなんか基底にあるんじゃないかと思わせるような。

岩谷 でもあれ、厳密なことを言うと、違うみたいですよ。たとえばスペインのフラメンコなんかは全然違う。

小西 あそこまで行くと全然違いますね。だけどトルコを通過してエジプト辺りまではなんとなく旋律が近いように感じます。確かにヨーロッパに入ると違ってくるね。

岩谷 フラメンコになると音楽の伝統も本当にいろんなものが入ってきています。北アフリカの経路からも入ってきているから。

小西 いろんなものが混交していく。でもインド起源説というのも微妙なところは多いとは言われています。

黒川 そのマーンガニヤールとランガー、二つ並べてよく語られるのは……

小西 彼らは、両方ともムスリムなんですけれども、ランガーのほうはジョードプル近郊に多くて、パトロンがムスリムなんです。スインド地方から来た近衛兵（スインディ・スイパーヒー）のような人たちがパトロンとしていた人たちなんです。一方マーンガニヤールというのは、ヒンドゥ教徒のほうでパトロンになっているので、王権や領主（ザミンダール）などと深い関係を持っている。

黒川 マーンガニヤールのパトロンにイスラムはいないんですか。

小西 いないですね。ヒンドゥだけなんです。

岩谷 じゃあ、ヒンドゥー専門のムスリムの歌い手みたいなの。

小西 そうです。ムスリムをパトロンとするのはランガーと呼ばれる。

黒川 それが絶対にはつきりわかれるん

ですか。たとえばランガーの一部の人たちはヒンドゥにもやっていますとかじゃないの？

小西 はつきりわかれてますね。

岩谷 なんてだろう。

小西 不思議に感じますよね。

黒川 彼らの間では言葉は通じるんですか？

小西 もちろん通じます。あと、レパトリリーがかなりかぶっています。

岩谷 なんだ、やっていること一緒なのに。

小西 フォークソングとして有名になつてしまうと、聴衆が聴きたがる。地域もジャイスルメールとジョードプルで離れてるんだけど、かなり行き来があるので、そういう中でレパトリリーを交換し合ったりとか。

黒川 ジャイスルメールの周辺にヒンドゥが多くてジョードプルの周辺にイスラムが多いとか？

小西 そういうわけでもないです。芸能集団としてパトロンを明確に分けているんです。たぶんあれはヒンドゥ／ムスリムで分けているというよりも、特定のパトロンについているということが重要なのであって、それがたまたまヒンドゥであった、たまたまムスリムであったということでしょう。

岩谷 それは裏切れないものね、確かに。じゃあヒンドゥー教徒からの要請に応じてムスリムの人が住んでいるところからすく離れていても出張するんですか。

小西 行きます。百キロ離れていても、お呼びが掛ければ飛んで行きます。

岩谷 近くの人に頼むわけにはいかないのね。

小西 系譜があるんです。自分たちのパトロンはどこに住んでいて、という……。

黒川 檀家を勝手に変えられないんだ。

小西 同じです。自分の息子が二人いて、自分がパトロンの世帯は五十世帯あると、息子二人に継承させる時は二十五世帯ずつきちりわけます。系譜屋をやっているんですよ、彼らは。ジェネオロジーのようなものを完全に押えているので、パトロンとして異物が入るといことはないんです。あれの息子が誰々で、その息子が誰々で、と全部押えている。

岩谷 じゃあ新規クライアントはないんですか。

小西 ないです。代々家ごとに、世帯ごとに自分達のクライアントをはっきり明確にしている。文字化はされていないんですけど。口で全部言えるんですよ。

岩谷 ニューカマーがやってくれと頼んでもやらない？

小西 だめです。

岩谷 やってほしいですよ、日本人だけ、やってほしい。

小西 そういふところは堅物というか、昔ながらのやり方をやっている。ただ、今はもう観光用に、系譜も行わない、神話語りもできない、ただ演奏力はすごい、という人たちが集まって別の芸能集団を

形成しています。ムサフィール（古典音楽家ハミッド・ジャズ系の芸能集団）のような芸能集団は、とにかく技能ばかりを集中してやってきた人たちで、アーティスト的な集団として集合して、パッケージ化されて、世界に送られていくようなタイプです。

黒川 だから彼らの演奏はなんかつまらないよね。商業化されていて心をうたないんだろね。

小西 その気持ちもわかります。

黒川 あれを売り物にしちゃったら……

小西 エンターテインメントとしては、非常に面白かったりします。でもレパトリーはかなりごちゃごちゃです。いろんな集団の、いろんな音を持ってきてミックスさせ、これがいわゆるラージャスターンのジプシー・ミュージックです、みたいな形でやる。

岩谷 ムサフィールって、ほとんどムサリムですよ。

小西 そうですね。

岩谷 一人ぐらいしかヒンドゥー教徒がいなかったような気がする。

小西 ムサフィールというのはベルシア語起源ですよ、たしか。

黒川 ヒンドゥーのそういう芸能集団っていないんですか？

小西 また別個で、もういっぱいいますよ。正確にはわかりませんが、タール沙漠にいてる芸能集団を数えただけでも、数百あるのではないのでしょうか。

岩谷 ひゃー！

黒川 でも、そういう正統なというか、

系統を担っている人はいない？

小西 ドーリーと呼ばれる、太鼓の集団たちがパトロンと正統に結び付いているという話です。実際に会ったことはないんですけど。

岩谷 生活の中でドルは息づいているんじゃないんですか。タップもそうですけど。

小西 自分達が演奏するかということですか、ビールとかが？

岩谷 結婚式とか葬式のとときにドルを持ち出して。

小西 自分達は演奏しないです。職能集団にやらせる。

岩谷 その集団の名前はなんですか？

小西 ドーリー（太鼓の集団）です。

岩谷 楽器と同じ名前なんですか。

小西 太鼓集団ということなんですよ。

岩谷 自称はわからない？

小西 実際に会ったことがないんです。僕の調査地では、儀礼的な機会では全てマーンガニヤールが役割を果たします。

岩谷 不可触民というわけじゃないんですか。

小西 不可触民だと思いますよ。

岩谷 マーンガニヤールは葬式の時もありますか？

小西 葬式はししないでね。

岩谷 それは誰がするんですか。

小西 葬式はメーグワルといわれる指定カースト集団が大きな役割を果たす。演奏はないんですけど。チッティーといっ

て、手紙ですよ、死者が出たぞということをや村々に知らせてまわる役割なども行います。

黒川 太鼓とか叩かない？

小西 叩かないですね。

黒川 普通、誰か死んだぞというのはアナウンスするためには、大きい音を出して通知するのではないかと思うのですが、どうやって伝えるのですか？

小西 口伝えに、それこそ何十キロ、何百キロと離れているところまで伝えないくんです。彼らは死と結び付いているから不吉な存在だ、ということが言われていて、足跡も残しちゃいけないんです。背中に巨大な枝の葉っぱを結びつけて、歩くとき沙漠エリアだから、さらさらと足跡を消す。それから彼らがいろいろなところに唾を吐かないように痰壺を抱えているとか。だから死の儀礼の場合は基本的にメーグワルと言われる不可触民が行う。で、楽しいハッピーな時はマーンガニヤールがやる。

黒川 そうだよ。系譜なんかをやる由緒正しき人たちはやらないのでしょうか。

岩谷 結構カーストのランクは高いんですよ。

小西 でもOBCです。

岩谷 OBCは高いんですよ。MBC、BC、その上がOBCですから。でも私たちが知っているのは、下ばかり。偏っているんです。

小西 ほんと、下層民ばかりです。

(次号に続く)

（緊急寄稿） 空港占拠事件とは、なんだったのか？

そむちやい吉田

11月25日。それまで首相府などを占拠し、抗議活動をしていたPAD（民主主義市民連合（反タクシン派））デモ隊がスワンナブーム国際空港を占拠したとのニュースが飛び込んで来た。その後、12月2日に憲法裁判所の与党解党とソムチャイ首相を含む幹部の5年間公民権停止という処分を受け、3日にデモ隊が退去してから空港が通常通りに業務を再開したのは、12月5日だった。その10日の間にタイが失ったものは、あまりにも大きい。すでに年末年始のホテル稼働率は10〜20%ほどだという。さらに全容がわかるには、まだ時間をかける必要があるだろう。この負の遺産を取り返す為、どれほどの年月を要するのか。まだ誰にも計り知ることは出来ない。

幸か不幸か、私自身も空港が占拠されていた期間にタイに滞在していた。25日にニュースを聞いたものの、27日には予定通り成田へ向かった。そこではバンコク便は欠航と知らされたが、代わりにプーケットを経由する便への振替

を出来ると言われたのだ。貴重な休暇を利用してのタイ行きだ。タイに入ってしまったら、あとはどうにかなることはわかっていた。結果、プーケットから1000kmをも陸路を移動してバンコク入り。帰り際には、2日に予定していた帰国便が取れずに6日まで足止めをされることになった。詳しいことは自身のブログ「サラブリーのひまわり畑」(<http://kaonon.seesaa.net>)をご覧ください。ただ、今回の事件を考察してみたので、ここにお届けしたい。

空港閉鎖という事件が無かったとしても、裁判所による決定は同じだったと予想されていた。だとしたら、PAD幹部やその影にいる首謀者たちは一体何を考えていたのだろうか。かつてタクシン氏が職を追われるに至ったのは、自らが得た力を過信して早急すぎた更なる権力の掌握だった。それと同時に国や国民が平等に享受すべき利益の独占だ。北部と東北部でタクシン氏の人気が強いの、それまではどの政権も顧みることの無



仮設チエックインカウンターが設けられたBITEC外観



意外に整然としていた仮設チエックインカウンター（タイ航空）



キャンセル待ちの人で溢れていたBITEC内部



12月5日国王誕生日を祝う装飾は街の至る所で見られる



何事も無かったかのような空港内

かった北部や東北部住民の暮らしの改善へ取り組んだからだ。貧困、麻薬など多くの問題を数に頼りにした強引とも言える手法で対応した。結果的に追い出されてしまったとは言え、評価されるべき点

ドキュメント：スワンナプーム国際空港封鎖

- 6月20日 PADが首相府を占拠開始
- 8月29日 南部3空港がPADの占拠により閉鎖
- 9月9日 裁判所命令によりサマック首相が失職
- 9月17日 ソムチャイ政権発足
- 11月14～19日 ガラヤニー女王葬儀が執り行われる。
- 11月20日から ソムチャイ首相 APEC 首脳会議へ出席のため、26日までの予定で渡航
- 11月25日午後 PADデモ隊が26日に帰国するソムチャイ首相を妨害するためにスワンナプーム空港へ移動を開始。
- 19時頃 デモ隊が空港への道路を封鎖。
- 21時頃 スワンナプーム空港当局が危険防止のために空港の一時閉鎖を決定。
- 11月26日 ソムチャイ首相がチェンマイ空港へ帰国
- 同日、ドムアン空港周辺で衝突。数名が死傷。
- ドムアン空港へ迂回で降り立った飛行機から乗客が3時間以上降りられない状態。
- また、バンコク上空でも着陸できずに待機する飛行機や離陸地へ引き返す便もあり、混乱の中で空港当局や政府から明確な指示、意向が伝わっていないことが伺える。
- 在タイ中国大使館やシンガポール当局などがタイへの渡航自粛勧告。
- 11月27日 やはりPADによって占拠されたドムアン空港の運用を停止
- 首相、占拠された2空港へ非常事態宣言を発令
- ウタパオ空港での代替輸送を開始。足止めされていた外国人客など数千人が出国開始
- 同時にタイ国際航空などによる入国便も受け入れ開始。
- 11月28日 日本航空、全日空もウタパオ空港からの臨時便運用を開始。
- 在タイ日本大使館は領事部を土日も開設して対応
- 同日までに首相によって首都警察や軍への対応要請がなされたが、具体的な行動は何もなし。
- 首相は、国家警察本部長を更迭。
- 陸軍司令官は、首相に対し議会の解散を提案するなど、指揮系統の混乱が極まる。
- 11月29日 裁判所による空港明け渡し要求をPADが拒否
- バンコク市民の7割近くが抗議活動には反対の意思を持っていることがアンケートにより明らかに。
- 11月30日 首相府やテレビ局、ドムアンなどで爆発事件が相次ぎ、数十名が負傷。
- タイ政府、足止めされた観光客へ1日2000パーツの支援決定
- 12月1日 スワンナプーム空港の残留機体が移動を開始
- 首相府のPADデモ隊が空港へ移動。
- AOT、BITECに仮設チェックイン施設を開設
- 12月2日 憲法裁判所、与党3党に対して解党処分と党幹部への5年間公民権停止の評決
- PAD、3日をもって集会活動などを中止すると発表
- 12月3日 スワンナプーム空港、一部運行を再開
- ドムアン空港、4日朝より全面運行を再開
- 12月4日 タイ航空局、5日11時より全面運行を再開と発表
- 国王陛下が誕生日スピーチをキャンセル
- 12月5日 スワンナプーム空港でも全面運行開始。足止め客への支援が9日までと発表
- 12月15日 民主党などによるアピシット政権が発足

それに対して反タクシン派PADは、単純にタクシン派による利益の独占をゆるさずと言う主張だが、決してその一点だけを求めているのではない。中心メンバーの一人であるチャムロン・シームアン氏は、1992年の民主化デモやバンコク都知事の頃から清廉潔白な政治家として今も支持されている。彼は、かつての愛弟子だったタクシン氏の裏側に潜ん

でいた利益獲得のための手法を嫌ってPADに合流したと思われる。また、創設者とも言っているソントンティ氏は、首相であった当時からタクシン氏の不正を糾弾し続けて来た一人だ。この二人のような理念と暴走する強大な権力に立ち向かうという表向きイメージから、PADが正義であり政権側は弱いものいじめをする悪者というステレオタイプな印象を持たされがちだ。しかし、この二人をサポートしていると思われるのがタクシン政権時代にその既得権益を奪われた幾多の財閥やマフィア達だと知れば、そのイメージも大きく変わらざるを得まい。その団結力は、タクシン派以上にもろく崩

れやすい土台の上に立っているはずだ。12月4日に予定されていた恒例の国王陛下による誕生日のスピーチが急遽中止された。皇太子によれば、体調不良が原因とのことだがそのまま受け取っている人は少ない。この日のスピーチには、タイ人のほとんどがこの争乱を鎮めるひと言を期待していたのだ。邪推すれば、国王陛下はこの日スピーチを行うには難しい状況にあった。その中でPADを支持するかのような言明をすれば、民主国家を退行させることに繋がる。逆に現政権を支持すれば、王室への信頼が揺らぎかねない。双方に対して、同じように効



閑散としていた団体ツアーのロビー

果をもたらず道として黙することを選んだのではないだろうか。どちらも同じタイに住むタイ人であり、一致団結することが必要だということを口にするのは簡単だが、黙することでその危機を一層深く理解させようとしたのではないだろうか。また、タイが抱えるもう一つの不安。現国王の不在という事態が遠くないことを現実化してみせたことで、その効果も一層引き立つものとなった。このことが直接的な原因かはわかりようも無いが、タクシン派が分裂し民主党政権が誕生したこととは無関係とはいえないだろう。

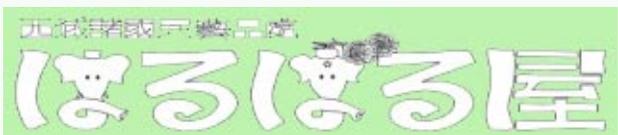
12月15日に選出されたアピシット首相ではあるが、党首を務める民主党はかつて、アジア通貨危機によってタイ経済がどん底に落とされた時にも政権を担当していた。今回も影から表からPADを支持して政権の奪取に成功したのだが、状況はさらに悪い。景気は放っておいても、良い時と悪い時とが巡るもの。アジア通貨危機をなんとか乗り切る直前にタクシン氏によって、漁父の利を奪われてしまった前回のような結果になりそうな予感もする。しかし、その経験を積んで来ている民主党による今回の政権交代は、タイにとっては悪い選択ではないとも思える。ただし、かつてタクシンの犬と揶揄されたネーウィン派が寝返ったことで実現したという過程を見ても、正攻法の政局運営では乗り切れそうもないことは明らかだ。とかくその若さやイケメンなどと話題先行ぎみのアピシット新首相であるが、その動向と手腕はタイ人のみならず世界から注目されている。

この事件の被害にあったのは、出国できなかつた外国人やタイに関係している企業だけではない。観光客相手に商売している多くのタイ人ひとり人に及ぶことを500〜1500バツの報酬と無料での飲食などで人をかき集めたPAD幹部たちは知らなくては行けない。これから訪れるであろう更なる不景気が、金融危機だけによるものではないことをしっかりと自覚して欲しいと願う。とはいっても、アピシット政権誕生後すぐにタクシン派によるデモ活動が活発化し

て来てもある。こちらに参加しているものも多く同じ方法で集められた人達だろう。特にこれからは仕事の口も減ってくるから、尚さら参加者も増えることが予想される。

日本でも昔から今に至るまで政財官の癒着による腐敗や利権構造が問題になっているが、タイの場合は官僚はほとんど力を持っていないものの、政界と財界は同じ人物によって動かされていると言っている。国会議員の多くが、財閥のトッブやその子息であることがその証拠だ。その構造を断ち切らない限り、タイの政治を巡る争いは終わらないのかも知れない。

インド・ネパール・アフガニスタン・バリなどなどからはるばるやってきた衣料品・織物・アクセサリー・楽器・CD・DVD、、、が皆様をお待ちしております



<http://www.harubaruya.com/>

180-0004 武蔵野市吉祥寺本町 1-8-3 コスモビル 2階

Phone & Fax. 0422-21-4790

渋谷アマリタ Phone & Fax. 03-3461-6563

吉祥寺別館 Phone & Fax 0422-22-2433

☆はるばる屋通信☆

あけましておめでとうございます
 本年も皆様に喜んでいただけるよう
 一生懸命商品を集めます
 ご来店を心よりお待ちしております

ベリーダンス、インド舞踊のイベントに
 商品を持って参加いたします。ご連絡ください。

ネットでのお買物もお楽しみください！

そむちやい吉田 (そむちやいよしだ)

フリーライター

著作：大人のタイ極楽ガイド、大人のイラスト会話集トラベル (実業之日本社) ばいりんまるタイ語 (ポプラ社)

1999年より7年間バンコクで暮らす間に結婚し、現在は東京で単身出稼ぎ中。一日も早くタイに戻るのが願い。タイ庶民音楽ルークトウン・モーラムについての第一人者。7月に早稲田奉仕園で初めての講演会が開催された。

ブログ：サラブリーのひまわり畑

<http://kaonom.seesaa.net/>

ルークトウン・タイランド！

<http://loogthungthailand.seesaa.net/>